

主 題：救われる信仰と救われない信仰 2

聖書箇所：マルコの福音書 11章1節～26節

火曜日の朝、イエス様一行は先週お話しした、イエス様がのろわれたいちじくの木が枯れているのを目にします。弟子たちはイエス様が言われたとおりになったのを見て、とても驚いたわけです。ということはイエス様がのろわれたとき、本当にそうなるとは信じていなかったこととなります。イエス様はそういう弟子たちの心を見て、「神を信じなさい。」と言われます。イエス様が十字架に架かり、彼らのところから離れて行かれた後、彼らがこの地上にあって、しっかりとキリストの栄光をあらわし、キリストのすばらしさを証していくために、どんなふうに進んで行くべきかを教えようとするのです。

信じた私たちが神様に喜ばれる者として進んで行くために必要なものは一体何なのかをここで見ていきたいと思えます。

1. 神への揺るがない信頼を持って生きて行くこと。20～23 節

イエス様は、現在形で、「神を信じなさい。」と言われました。継続してこれからずっと神様を信頼して行くことに力があるのだとお話になったのです。23 節でイエス様が言われたことは、我々人間はそんなことできるはずがないと思うけれども、相手は神様で、全能のお方だから、疑わずに信じなさいというのです。

実は私たちは、神様のご性質、神様の約束を信じ切ることがなかなかできません。例えばよく「私、救われているかどうかわからない」、「そんな気がしないし、そんなふうに感じない。」という話を聞きます。これは神様の言葉よりも自分の感情を信頼していることです。神様の言葉だけでは不十分だと言っているのです。これは不信仰です。そういうときは、みことばに戻って、イエス・キリストを信じる信仰によって救われる、神様のおっしゃったことは必ずそうなる私は疑わない、私はみことばに立ちますと言うのです。こういう信仰が神に喜ばれるのです。神を神として崇めるというのはそういうことです。

今の世の中を見た時に、信仰の試練がいっぱいあります。リストラ、老後、結婚など心配や不安は幾らでもあります。イエス様を知らない人々がそれらを心配するのはわかります。でも、クリスチャンが心配するのは間違いです。我々が心配しなければならないことは、死んでから先のことです。死んだ後、我々は神の前に立ち、イエス様を信じてからどんなふうに進んで来たかを問われるわけです。先のことを心配して、心配ゆえに私たちが神様を疑ってしまうようなことがあれば間違っています。みことばに「たとえ死の谷の陰を歩むことがあっても私は災いをおそれません。それは、あなたが私とともにおられますから」とあります。ダビデはこんな信仰者だったのです。そしてそんな信仰者であることを神様は今私たちに望んでいるのです。神様はあなたを離れず、あなたを見捨てず、力強い御手をもってあなたを守り導いてくださる。そして神様は必要を与えたとおっしゃって低ます。あなたに何が必要で、いつ与えたらいいのか、神様はご存じだということです。神様がそうおっしゃっているのですから、心配することをやめることです。もし私たちが不安ゆえに落ち込んでいるならば、我々の信頼に問題があることに気づかなければいけません。

旧約聖書の勇者の一人であるダビデという王様がいます。この人の人生も大変なものでした。ご存じのように、彼は何も悪いことをしていないのに、サウロ王様から命を狙われていました。ある時、ダビデはサウロから、もう何もしないから帰っておいでと招かれます。でもダビデは信用できず、ペリシテ人の地に逃れて行きます。ペリシテ人の地で、アキシュに仕え、信頼を勝ち取りました。そしてペリシテ人がイスラエルを攻める時に、ダビデもついて行きますが、ペリシテ人の首長たちに拒絶されてしまいます。

そして、ペリシテ人のところから、しづしづ自分の町に戻ってみると、そこはアマレク人によって滅ぼされた後だったのです。自分の愛する妻、子供たちが連れ去られてしまっていました。その責任が全部ダビデに転嫁されて、仲間がダビデを石で打ち殺そうと言い出します。そういう中でダビデはどうしたかというと、「しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った。」とあります。ダビデは神様を信じたのです。そして、神はその祈りにこたえられ、ダビデを祝し、力を与えたのです。神を信頼する時に神様は大いなる祝福を与えられるのです。(1サムエル 30 章 1～6 節)

もう一人の旧約のヒーロー、アブラハムに 1 人の子供が生まれるという約束を神様がお与えになります。アブラハムはおよそ 100 歳、奥さんのサラも高齢でした。人間的に見たらそんなことはあり得ない

と思えることでも、神がおっしゃったから必ずそうなる、彼は信じ切ったのです。だから、彼は義とみなされ、神様に祝されました。(ローマ4章19節)

あなたがどんな不安を抱えていらっしゃるか知りません。しかし、あなたの信仰が神様に喜ばれるものになるために必要なことは、神様の言われていることを完全に信じることです。

2. 神様への従順

24節のみことば——だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります——は、信頼の実践です。それが一番顕著にあらわれるのが祈りです。どんな時でもあなたのみこころに従っていきますという祈りを心からなす人々は、神を信頼する人々であり、神様のみこころ、従順を求める人々です。

神様の前に一番喜ばれることは、いけにえやどんな働きよりも従順です。1サムエル15章22節で、サムエルがサウロ王様に、「主は主の御声に聞き従うほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」と言います。24節の「もう既に受けたと信じなさい」というのは、既にその祈りの許可が与えられたと信じなさいという意味です。このみことばは、私たちに自分の好きなことを祈り求め、そしてあなたが心から念じて絶対そうなると思えば、必ずあなたの欲しい物が与えられるということではありません。神様が教えているのは、みこころを求めるならば、必ずみこころがなるということです。神様は常にみこころを行われるからです。私たちの確信とは、神のみこころにかなう願いをするならば、必ずその祈りは聞かれるということです。(1ヨハネ5章14、15節)

神様はみこころを行われます。神は常に最善なことを行われるのです。ですから私たちが神様のみこころを求めるということは、信仰の告白でもあるのです。我々が自分の思いどおりになることを望んでいるのか、神様のみこころを求めているのか。それは自分の祈り、つまりどんな態度をもって神様に接して行くかによって明らかになります。もし、自分の思いどおりになることを望んでいたら、自分の思いどおりに物事が進まなければ、神様に対して怒りをもちます。しかし、神のみこころを求めるというのは、神様あなたのみこころがなされていることを信じ続けていけるように、私に忍耐をください。すぐに私の心が神様に対して、何もなさっておられないかのような疑いをいただくように誘惑しますけれども、最善をなすと言われたあなたを信じます。どうぞみこころをなしてくださいという祈りです。

どうしたらみこころがわかるのか——。ローマ12章2節に「神のみこころは何か、すなわち何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきま知るために、心の一新によって自分を変えなさい」と記されています。つまり、神様のみこころは、神の前によいことであり、神に受け入れられることだということです。自分の思いどおりになりたいという思いが強ければ強いほど、冷静になって神のみこころを求めることができません。もし神のみこころを求めていくという生き方をあなたが望んでいるならば、あなたのしようとするのを、あなたがやりたいとかやりたくないではなくて、神が喜ばれるのかどうかをもって判断していくのです。

我々は祈りというと、願い事をすると思っています。例えば安産祈願とか、合格祈願とか、交通安全とか私たちは必要に応じていろいろな祈りをしてきました。そしてお賽銭をたくさん投げることによって、お百度を踏むことによって、きっと神様は祈りにこたえてくれるに違いないと思込んできた。イエス様を信じて本当に救われた後も、その習慣がずっと続いているのです。だから私たちも、教会に熱心に来さえすれば、献金をたくさんすればきっと神様は私の望みをかなえてくれるに違いないという思いをもって祈ってしまいます。

神様は、祈りは礼拝だと教えてくださっています。どうしてそんなことがいえるのか。この機会にしっかりと私たちは学んでおきたいと思えます。

マタイ6章に、一般に「主の祈り」と言われているところがあります。どうやって祈ったらいいのかと質問してきた弟子たちに対して、イエス様がこんなふうに祈ったらいいよと教えられた一つの模範的祈りです。それは、5つの部分に分けて見ることができます。

1つ目、「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように」。まず一番最初に神様を崇めるわけです。つまり神様の偉大さ、すばらしさを言葉に出して宣言するのです。

2つ目「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」。これは地上でも神様あなたのみこころをなしてください。なぜならあなたのみこころが最善だからですと言っているのです。私の思いどおりにしてくださいとは言っていない。ですから、この祈りは、神様のご計画こそが一番だということを改めて公にしているのです。

3つ目は「日ごとの糧をきょうもお与えください」です。すべての必要が与えられるようにと祈っているのです。この祈りは、神様がすべての必要を与えてくださるということを断言しているのです。

4つ目「私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」とあります。これは罪の赦しです。このみことばで言っていることは、自分が人の罪を赦したから神様は私の罪を赦してくださるという意味ではないのです。神様が私の罪を赦してくださったということを断言しているのです。この祈りをする時に、自分が赦されたということを覚えて、そのことを感謝し、その赦された者が神様がなしてくださったことをほかの人にも実践しようということです。

5つ目、「私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください」とあります。神様の守りと助けを求めているのです。疑いを持ってではなく、神様は絶対に守ってくださる方だと断言するのです。

こうして見てみると、この「主の祈り」は、全部神様がどんなにすばらしい方であるかを宣言しているに過ぎないのです。自分自身の神様に対する信頼、その信仰を証しているに過ぎないのです。自分の個人的な祈りがここには入っていない。それだけではなくて、自分自身の願いよりも神様のみこころがなるようにと願っているのです。そしてみこころを求めて、それに従っていこうとするみずからの新たな決心が含まれています。だからこういう祈りは栄光をあらわすのです。一生懸命私は念じますから神様これを下さい、あれを下さいというのは、自分の欲しい物を求めているのです。そしてそういう祈りをしていると、いつか失望するのです。そして、もう神様なんて祈らない、あなたは冷たいお方だと言って神様に対して腹を立てる。そんな祈りは栄光をあらわすことはできないのです。

この祈りに関して、アメリカでも日本でも「ヤベツの祈り」という本が今非常に売られています。ブルース・ウィルキンソンさんという非常に立派な神学者がお書きになっています。しかし、この本を読んで非常に心配するところがあります。この本は、「祝福を求めて祈りなさい。」と言います。ところが、エペソ人の手紙の1章19節に「また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように」と教えています。つまり神様は十分な祝福でもって私を祝してくださった、どうぞそのすべての祝福を理解することができるように助けてくださいと祈りなさいと、教えられているのです。神はもう必要なものは全部下さっているのです。

またあの本の中では、神の祝福を求めることが私たちにとっての究極の礼拝の行為だとあります。でも、今我々が学んだ主の祈りの中に、「神様どうぞ私を祝してください」という祈りは入っていません。なぜなら神様が下さった恵みに欠けたところはないからです。

もう一つパウロがクリスチャンとして一番望んでいたことは、ピリピ人の手紙の3章10節「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです」。このみことばを原語で見ると、最初に非常におもしろい冠詞がついています。それは、心の中に堅く決めた目的をこれから言おうとしていることをうかがわせます。そして、この「知る」という言葉は、単なる知識を得るだけではなく、キリストの経験そのものに預かることを言っているのです。パウロは、キリストという方を頭で理解するだけではなくて、どんなふう生き、いろいろな苦しみにどのように勝利してきたのかを知りたいというのです。イエス・キリストはその死から敢然とよみがえってきた、復活の力を持っていらっしやった。その力が今の私の日々の生活にどんなふうに影響を与えていくのかを知りたいというのです。このキリストの力によって人生を歩むことがパウロの人生の目標だと言うのです。

ジョン・カルバンという神学者は、「その死と復活とがいかに価値があるか、それは我々の中にいかに効果があるかを我々が感じる時に、切に知られるのである。」と言いました。つまり、イエス様の死と復活が、どんなに自分の生活に価値があるものなのか、どんなに効果をもたらすものなのか、そのことを私はしっかりと感じたい、経験したいと言っているのです。

その本を非難して、その著者を悪く言おうという思いではありませんが、私たちはこういう祈りを捧げることによって自分が祝されるというような、瞬間靈的成長法とでもいいますか、インスタントの成功法を求めるものです。しかし、聖書は我々の信仰の成長には時間がかかると言っています。みことばを学び、みこころを知り、神のそなえてくださった助けによって、そのみこころに従っていこうとする。そして失敗を犯せば、神の前に告白をして、みことばに従い続けていこうとする。そのプロセスを経て、我々は成長していくのです。近道はないのです。

生きた神に喜ばれる信仰者となっていくために必要なことは、神様に対する揺るがない信頼を持つことです。そして常に神のみこころを求めて、それに従っていく。そういう歩みをなすようにと神様が教えてくださっているのです。そのような歩みをもって主の栄光をあらわしていきましょう。